

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2870501224		
法人名	社会福祉法人 光朔会		
事業所名	グループホーム オリンピア兵庫		
所在地	兵庫県神戸市兵庫区小松通5丁目1-14		
自己評価作成日	平成23年12月1日	評価結果市町村受理日	平成25年1月24日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-kouhyou-hyogo.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 H.R.コーポレーション		
所在地	兵庫県西宮市松風町2-5-107		
訪問調査日	平成24年1月23日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「認知症になっても、誇りを持ってこれまでどおりの暮らしを安心して続けていただくお手伝い」を理念に掲げ、利用者ひとりひとりの「その人らしさ」を大切に、パーソンセンタードケアを提供している。家庭的な環境の中で、利用者のこれまでの人生をよく知り、グループのもつ力を活用することにより、残された能力や可能性を最大限に引き出すケアを行っている。また、デイサービス、ショートステイを併設し、住み慣れた地域で継続的にケアを受けることができる、小規模多機能ホームであることも大きな特徴である。地域に開かれたコミュニティカフェ「Cafe Olympia」を併設し、地域住民とともにSalon de l'Olympia(コンサート・落語会等)や「オリンピア福祉塾講座」を開催するなど、地域との協働も多い。さらに、スウェーデンをはじめとする国内外からの見学・実習の受け入れや、大阪大学大学院などの研究機関と共同研究を実施するなど、認知症ケアの発展にも力を注いでいる。

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

年々理念の浸透は深まり、職員全体で理念に基づいて、利用者の身体機能の低下があっても利用者一人ひとりがその人らしく過ごすことができるケアの継続に取り組んでいる。家庭的な環境の中で、利用者は買い物や外出等で地域に出向いて交流を継続したり、利用者の趣味活動での地域とのつながりを持つようになっている。さらに、「オリンピア福祉ゼミナール」を定期的に開催し、地域の方に向けての講演を行い、地域への事業所としての特色を生かして還元を行い、地域とのつながりを持っている。利用者と職員が日々関わる中で、思い出の品や写真などを見ながら利用者の思いや意向・希望を聴取するようにし、利用者の馴染みの場所や懐かしい場所への外出や旅行などもできるように支援している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を 掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求め ていることをよく聴いており、信頼関係ができてい る (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面が ある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域 の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係 者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理 解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表 情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満 足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく 過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにお おおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟 な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および第三者評価結果

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	利用者ひとりひとりの「その人らしい暮らし」を支えるオリμπピア兵庫の理念、そして理念の実践のための3つの約束を作成し、毎日の朝礼、毎月のカンファレンス、内部研修等を通じ、全スタッフで共有、実践をしている。	職員の入れ替わりも少なく、年々理念の浸透は深まっている。利用者の身体機能の低下があっても利用者一人ひとりがその人らしく過ごすことができるような支援を心掛けている。月1回のカンファレンスで理念に基づいて利用者の一人ひとりのケアについて振り返る機会を持ち、事業所の理念を利用者のケアに具体的に活かせるように理念を身近なものにしている。各ユニット毎に作成されるマンスリーレポートも継続しており、理念に基づいた現状に即した月目標を持ち全職員で取り組んでいる。理念に基づいた研修も継続している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日々の外出、買い物等、「地域で暮らす」ことによる地域交流を図るとともに、祭りへの出店や勉強会の開催をしたり、地域住民と共同でSalon de l'Olympia(コンサート等のイベント)を開催するなど、日常的な交流を行っている。	買い物や外出等で地域に出向いて交流を継続したり、利用者の趣味活動での地域とのつながりを持つようにしている。2カ月に1回、「オリμπピア福祉ゼミナール」を定期的に関催し、年金の話や遺言の話など地域の方に向けての講演を行い、地域への事業所としての特色を生かして還元を行い、地域とのつながりを持っている。月に1回放送局の取材を受けており、地域とつながりながら暮らし続けている利用者や地域住民との交流ができていることが確認できる。地域で活動しているオカリナサークルの練習に場所提供し、交流の機会ができています。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「オリμπピア福祉塾講座」等の勉強会を開催したり、地域の認知症に関する相談に乗るなど、現場での経験を共有している。また、館長が神戸市認知症介護サービス研修の講師を務めたり、地域での講演活動も積極的に行っている。		

自己 者 第	三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、写真やビデオ等を利用して各ユニットの日々の生活や行事の様子を紹介したり、質向上のための話し合いをしている。出された意見はユニットで共有し、サービス向上に取り組んでいる。入居者も数多く参加している。	利用者代表、利用者家族代表、地域住民代表、市職員、地域包括支援センター職員、知見を有する者が出席し、2カ月に1回定期的に開催している。会議の参加メンバーも変更なく、参加メンバーが楽しみにされる会議の開催継続ができています。参加家族も家族の希望により増えている。会議では参加メンバーから意見や提案が出され、意見交換が活発に行われている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市担当者とは日常的に情報交換を行い、協力関係を築いている。また、館長が市の研修で講師を務めたり、市担当者からの依頼で国内外からの見学・実習を受け入れたりもしている。	市の担当者とは日々連絡を取り合う関係の継続ができています。市からの依頼で見学者の受け入れを行ったり、市の主催する研修へ館長が講師として出向いたり市との協働が活発に行われている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止の理念をトップを含め全職員が共有するとともに、身体拘束廃止マニュアルの作成し、研修を実施している。また、玄関のドアは日中施錠せず自由に出入りができるほか、心理的なロックをかけないように取り組んでいる。	身体拘束をしないケアの実践が徹底されている。身体拘束廃止マニュアルを作成し、研修を通して理解を深めると共に拘束の範囲についても理解を深めている。玄関は日中は施錠せず、利用者が自由に出入りすることができるようになっている。また言葉や態度での拘束についても理解しており、利用者がその人らしく自由に過ごすことができるように支援している。	

自己 者 第 三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6) ○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止に関する研修を定期的実施し、虐待の定義や高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を設けている。また、日々のケアにおいても、虐待につながりそうな危険がないか、常に注意し、話し合う機会を設けている。	高齢者虐待防止についての研修も計画的に行い、拘束だけでなく虐待についても正しく理解し周知徹底が図られている。総施設長・館長が講師となり法人全体で行う研修の他、各ユニットでもリーダーが講師となり学ぶ機会や全職員で話し合い検討する機会を持っている。様々な日々のケアの中での事例を取り上げ、話し合いや検討を行い拘束や虐待につながらないように取り組んでいる。入居時の情報収集時には、話題に出さない方が良くも確認し、虐待や拘束につながらないようにしている。	身体拘束・虐待について今後も研修や検討を重ね全職員で理解と浸透を深め、利用者一人ひとりがその人らしく過ごすことができる支援の継続を行っていく取り組みが望ましい。
8	(7) ○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する制度の理解と活用について研修を行い、管理者や職員が知識を深める場を設けている。また、必要と思われる利用者については、関係機関への橋渡しを早急に行っている。	行政書士の方が講師として来訪しリーダーへの研修を実施し、リーダーが各ユニットで職員の権利擁護の制度への理解を深めるように取り組んでいる。	
9	(8) ○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結、解約、改定の際には、利用者や家族の立場に立って、十分に理解してもらえるように説明を行っている。また、疑問点に関しては速やかに解決できるよう、対応している。	館長と管理者で契約の説明を行うようにしている。契約時には、重度化や終末期への方針や対応については利用者・家族に十分に説明を行うようにしている。デイサービスやショートステイを利用していた方が利用に至る方が多い。	
10	(9) ○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に1度ご家族懇談会を開催するほか、家族も含めた食事会等の行事を随時開催し、意見・要望を聞く機会を設けている。出された意見・要望は職員で共有し、速やかに運営に反映させるよう取り組んでいる。	年1回の家族懇談会を開催し意見や要望を聴取する他、様々な行事や懇親会等に参加してもらい意見や要望を聴取するようにしている。家族の面会等での来訪時には、職員から挨拶等で声をかけ、利用者の普段の生活状況等を話し、家族が思いや意向・要望等を言いやすいように配慮している。	

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	館長がリーダーおよび全スタッフ対象に定期的に面談を行っているほか、食事会を催すなど、日常的に職員が意見や提案をしやすい関係性を築いている。また、法人全体として、職員の提案を積極的に採用する方針を定めている。	カンファレンス・ミーティングの機会に職員が意見や提案を言う機会がある他、日常的に意見や提案を言いやすい雰囲気があり、業務上や環境面などリーダーへ直接出されることも多くある。出された意見や提案等は検討や話し合いを繰り返し行い、積極的に取り入れて運営やサービスに反映させるようにしている。マンスリーレポートの中で、利用者について・スタッフについて・総括・目標についてが記載されており、ミーティング前にはマンスリーレポートに目を通してミーティングで議論を行うようにしている。館長が定期的に全職員と面談を行い、話し合う機会が設けられている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員ひとりひとりが毎年目標を設定し、それに対する自己評価および上司による評価を実施することによって、向上心をもって働ける環境を整備している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人の事業目標として「質の高い人材の育成」をかけた、職員ひとりひとりに必要とされる技能や知識を把握し、それぞれの段階に応じた研修やトレーニングの機会を積極的に提供している。年1回の海外研修も実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内外の施設や同業者との交流を通じ、サービスの質を向上させるように取り組んでいる。また、他施設からの見学・実習の受け入れも積極的に行う他、パブリシティやシンポジウム等を通しての情報発信も積極的に行っている。		

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス導入段階においても、パーソン・センタード・ケアの理念に基づき、本人の立場に立って、困っていることや不安・要望に耳を傾けている。さらにその情報を共有することによって安心できるケアの実践に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居までに、利用者本人や家族と面談をしたり、訪問してもらう機会をつくり、信頼関係を構築し、不安や疑問を取り去った上でサービスの導入を行うようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族がいま置かれる状況を的確に把握し、その時に必要としていることを支援するようにしている。必要に応じて、法人内外の他のサービスや機関への橋渡しも行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	パーソンセンタードケアの理念のもと、お互いが必要とし、支え合い、向上することができるような関係性の構築に努めている。スタッフは一方向的にケアを行うのではなく、共に暮らしをつくることを大切にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は、本人と家族の関係の深さを理解し、「家族にしかできないこと」を活かしながらケアを行うように努めている。常に家族と密に情報交換を行い、共にケアをつくりあげていくように取り組んでいる。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(11) ○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者ひとりひとりのこれまでの人生をよく知り、「夢のプロジェクト」として、馴染みの人との面会や、思い出の場所や馴染みの場所への訪問を支援するなど、これまで大切にしてきた関係性を途切れさせないように努めている。	普段利用者と関わる中で、利用者一人ひとりの馴染みの場所や馴染みの人を聞き出すように配慮している。各利用者に希望を聞き、希望があれば「夢プロジェクト」の企画として、馴染みの場所へ出向いたり、馴染みの人との交流を持つことができるように支援している。利用後にできたデイの利用者との馴染みの関係や同法人のグループホームの利用者との馴染みの関係の継続もできるように支援している。	
21	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者ひとりひとりの状況やその関係性を常に把握し、利用者同士が関わり合えるように、職員はグループ・ダイナミックスを利用しながら間に入り、支援をしている。		
22	○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	自宅に戻るため、あるいは長期入院のために退去した利用者とも必要に応じて連絡を取り、必要な支援を提供している。またそのご家族ともイベント等を通じて交流を継続している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
23	(12) ○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者ひとりひとりのことをよく知ることで、思いや希望を常に把握し、日々のケアに活かしている。困難であっても、非言語コミュニケーションやご家族・知人等のご協力によって、利用者本人を中心とした意向の把握に努めている。	利用者職員が日々関わる中で、思い出の品や写真などを見ながら利用者の思いや意向・希望を聴取するようにしている。利用者が意思表示することが少なくなる中で、利用者自ら意思表示しやすい言葉かけや会話など、職員が利用者の思いや希望・意向を引き出せるように積極的に関わりを持つようにしている。	利用者の思いや意向・希望を表出しにくくなる中で、利用者の立場に立って考え、検討し一人ひとりの思いや意向・希望を把握する取り組みが望まれる。

自己 評価	第三者 評価	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者本人や家族の協力によって、利用者ひとりひとりの個人史を把握しているほか、嗜好や生活環境についても、本人や家族から詳細な情報を得るように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者ひとりひとりの日々の状態、残されている力を、偏見や思い込みにとらわれないように、常に新たな視点で把握するように努めている。特に、変化した点については、小さなことであっても職員間で情報共有を行うように取り組んでいる。		
26	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者本人や家族の希望やアイデア、そして職員の日々の気づきを介護計画に積極的に反映させるように、チームでアプローチしている。また、日々のカンファレンスや毎月の事例検討においてモニタリングを実施し、現状に即した介護計画を作成・実践している。	ユニット内で行われるミーティングで、毎月利用者の状況を確認し、計画に沿ったケアの実施が行われたことについてモニタリング・評価を行っている。ワーカー日誌で日勤帯・夜勤帯で利用者の生活や身体の様子が詳細に記載されている。	ワーカー記録に利用者の生活の様子や身体の様子が記載されているが、職員が日々関わる中での利用者について観察したこと、感じたことを記録として残し、利用者への予防的なケアに活かしていく取り組みが望まれる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者ひとりひとりの“今”や個性を大切に日々の状況を適切に記録し、職員間で情報を共有した上でケアに活かしているほか、小さな気づき等についても記録し、申し送りを徹底し、ケアの実践や介護計画に反映させるようにしている。		

自己 評価	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	従来のサービスの枠にとらわれず、利用者ひとりひとりの状況やニーズに応じた、柔軟なサービス提供に取り組んでいる。また、オリμπピア兵庫として、デイサービス・ショートステイとを組み合わせ、小規模多機能ケアに取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	オリμπピア兵庫の存在する地域において、商店街や老人会等と協力し、地域資源を把握するとともに、利用者ひとりひとりの地域生活の支援のために、地域のもつ力を活用している。		
30	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医療機関または希望する医療機関のかかりつけ医を選定し、受診できるように支援している。また、かかりつけ医は定期的な往診をし、利用者の健康状態を把握するとともに、本人・家族が希望を伝えやすい環境づくりをしている。	協力医療機関の変更はない。利用者・家族が希望する医療機関へ受診できるように支援している。同建物内のデイサービス・ショートステイの事業所の看護師の配置があり、いつでも相談できる体制が整えられている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は、日常的にオリμπピア兵庫の看護師と緊密な情報交換を行っている。体調が悪化したときや急変時等は、必要に応じて看護師が対応したり、相談に乗ったりしている。		
32	(15)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際には、オリμπピア兵庫と病院の医師、看護師、地域連携室、家族等が情報交換を行い、早期に退院できるように支援している。また、日頃から協力医療機関と情報交換を行ったり、利用者の入院時にはスタッフや利用者が見舞いに訪れたりしている。	入院される場合には、利用者の状況や状態を医療機関へ情報提供できるように書面を用意し提供している。入院中も医療機関との情報交換を行い、早期に元の生活に戻ることができるように支援している。また、入院中には職員が面会に行き、馴染みの関係が途切れないように支援している。	

自己 評価	第三者 評価	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(16)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合の対応に関して、入居時に方針を確認するとともに、その後も状態の変化に応じて随時、本人・家族と館長・管理者・スタッフ等が話し合う場を設けている。終末期にはかかりつけ医等の関係者とともにチームで積極的にターミナルケアに取り組んでいる。	重度化・終末期に向けた指針を作成しており、契約時より説明を行っている。医療依存度が高くなければ、できる限り看取りまで行う方針である。利用者の状態に応じて、利用者家族・医療関係者・職員と話し合いを繰り返し行い、統一した方針で看取りが行えるように取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	スタッフが緊急事態に対応できるように、市民救命士講習等外部研修に参加したり、内部研修を定期的開催したりしている。また、利用者への個々の対応に関しては、普段よりユニットで想定される事態をシミュレーションしている。	/	/
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	非常災害時への対応についてスタッフが定期的に研修を受講するほか、年に2回、昼間想定・夜間想定での消防避難訓練を実施している。また、地域の消防署・交番等とも日常的に情報交換を行い、緊急時への備えを行っている。	年2回昼夜想定での消防避難誘導訓練を行っている。現在、地震後の津波の想定が変更になり災害時の対応についても見直しを検討している。また、運営推進会議等で地域との協力体制を整えるように取り組んでいる。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「オリμπピア兵庫3つの約束」のひとつとして、スタッフは利用者に敬語で話をすることを徹底している。また、日々の生活の中でも、「誇りを持ったこれまで通りの生活を送るお手伝い」の理念の実践に努めている。	プライバシー・尊厳とは利用者個人が知られたくない、見られたくない、守りたいことと捉え、利用者一人ひとりに合わせた尊厳やプライバシーの保持が行えるように支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の自己決定を引き出す声かけを行い、ひとりひとりの思いや希望を引き出すよう努力している。また、その思いや希望は、たとえ困難なことであっても、実現できるようにチャレンジしている。	/	/

自己 者 第 三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「生活の主人公は利用者本人である」という理念のもと、利用者ひとりひとりの生活のリズムやペースを大切に支援を行っている。職員は、利用者の日々の希望を引き出すよう、取り組んでいる。		
39	○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者ひとりひとりの「その人らしさ」を引き出す服装や身だしなみができるように支援している。また、利用者ご本人が服を買いに行く機会を設けたり、玄関に鏡を置くなど、日々の生活の中におしゃれを取り入れる支援をしている。		
40	(19) ○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	「食事は人の心が最も開く時間」と捉え、利用者もスタッフもゆったりと食事の時間をたのむことができるようにしている。準備や後片付けについても、ひとりひとりの持てる能力を引き出し、積極的に参加してもらうようにしている。	栄養士の立てた献立を基に、フロアで利用者と共に調理から行い、食べることへの張り合いや楽しみとなるように取り組んでいる。利用者が調理に参加しやすいように、職員は調理器具の工夫を行い、利用者ができる限り参加できるように取り組んでいる。	
41	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事のメニューは館長やオリμπピア兵庫の栄養士が常にチェックを行い、栄養面だけでなく季節の旬の食材を使うことや、彩りにも細心の注意を払っている。また、スタッフが一緒に食事をし、ひとりひとりの摂取量を把握している。		
42	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ひとりひとりの口腔内の状態や、能力に応じた口腔ケアを実施している。また、協力医療機関の歯科医院からも定期的に検診に来てもらい、専門的な立場からのアドバイスをもらってケアに活かしている。		

自己 者 第	三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ひとりひとりの排泄の状況、能力を把握し、可能な限り自立して排泄できるような支援を行っている。また、おむつメーカーと協働し、専門的な立場からのアドバイスをもらうことにより、ひとりひとりの排泄環境の向上にも日々努めている。	トイレでの排泄が行えるように支援している。利用者一人ひとりの排泄の状況を把握し、声かけや誘導、パット交換など必要な支援を行っている。排泄物品も専門的な立場の方のアドバイスにより、利用者一人ひとりの状況に配慮された排泄が行えるように支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	オリμπピア兵庫の看護師・栄養士の協力を得て、食事のメニューの工夫や適切な水分補給を行うことにより、便秘を予防する取り組みを行っている。また、利用者ひとりひとりの能力に応じ、積極的に運動してもらえよう、支援している。		
45	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	職員の都合ではなく、朝・昼・夜を問わず、利用者の希望するタイミングで、満足できるように入浴してもらえよう支援をしている。あまり入浴を好まない利用者についても、声かけや工夫によって、期間が空きすぎないように取り組んでいる。	利用者の希望に合わせていつでも入浴することができる。なるべく隔日で入浴ができるように、声かけや誘導などを行い、利用者の状況に合わせた入浴が実施できるように取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	定時就寝・定時起床ではなく、利用者ひとりひとりの生活のリズムやその日の状況に応じて、安心して寝てもらえるようにしている。必要であれば、食事の時間を調整するなど、安眠のための支援を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員ひとりひとりが確実に薬の目的や用法を理解し、適切な服薬の援助ができるように、日々情報の共有を行っている。特に、新しい薬が処方されたり、薬が変更された場合、確実に申し送りを行い、誤薬等の事故の防止に努めている。		

自己 者 第	三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者ひとりひとりが責任や役割をもって日々の生活を送ることができるように、ひとりひとりの個人史等も活用しながら、支援を行っている。また、常に新しいことにチャレンジし、毎日たのしみがあるようなケアを心がけている。		
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者ひとりひとりの希望や気分に応じて、気軽に外出できるように支援を行っている。普段行けないような場所でも、家族との協力のもと、ハワイ旅行・淡路島旅行・六甲山旅行等、これまでも本人の希望を数多く実現させている。	利用者の希望に合わせて外出ができるように支援している。関わる中で聞かれた利用者の馴染みの場所や懐かしい場所への外出や旅行などもできるように支援している。外出については、その利用者が楽しめるかどうか、外出の目的などを利用者中心に考え、個別、少人数、大人数、全員と様々な形で外出が行われている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者が自分の思いによってお金を使うことができるように、それぞれの能力に応じた支援を行っている。また、Cafe Olympiaや、移動パン店、地域の商店や祭りへの外出など、お金を使う機会も積極的に提供している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者が家族や友人に気軽に電話をしたり、季節の手紙やハガキをやりとりしたりできるように、支援をしている。絵手紙に挑戦したり、海外で暮らす家族に手紙を送ったりと、その取り組みは広がりを見せている。		

自己 者 第	三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	オリμπア兵庫は人間科学の研究に基づいて設計されており、利用者の居心地のよさへの配慮が徹底されている。また、各ユニットをひとつの「家」として捉え、それぞれの利用者・スタッフの望む生活感や季節感を取り入れるようにしている。	玄関は観葉植物を置き、行事の写真・職員紹介のため写真を掲示している。家庭的な雰囲気のフロアでは、ゆったりと過ごすことができる共用空間になっており、利用者はソファやテーブルで、一人でゆっくりと過ごしたり、複数の利用者が自由に寛がれる居場所が作られている。ユニット間は廊下で自由に行き来が出来閉鎖感を感じさせない。対面式のキッチンからリビングで過される利用者の様子が一望でき、生活感が感じられる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ひとりで座れる椅子、2人で落ち着けるソファ、3人で話ができるテーブルセットなど、オリμπア兵庫ではたくさんの居場所を提供している。また、「死角」も積極的に活用し、安心して過ごすことのできる居場所づくりに取り組んでいる。		
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	「その人らしさが伝わる部屋」を目標に、使い慣れた家具、思い出の写真や品々、そして好きな物に囲まれた居室づくりを、利用者ひとりひとりの思いにあわせて行っている。家族の協力も大きな力となっている。	居室は他の利用者の気配を感じながら、思い思いの時間を過せるよう配慮されている。室内には、家族の写真や手作りの作品などを飾り、利用者のなじみの品や思い出のものを持ち込まれ、個性豊かな部屋作りができており、その人らしく安心して過されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	オリμπア兵庫では、手すりを限定された場所にも設置したり、不必要なサインは設置しないなど、安全に配慮した上でできるだけ自立した生活を送ることができるように工夫をしている。		